

引用文献

Damon, W., & Hart, D. 1988 Self-understanding in childhood and adolescence. Cambridge: Cambridge University Press

Harter, S. 1999 The construction of the self: A developmental perspective. New York: Guilford Press.

佐久間路子 2006 幼児期から青年期にかけての關係的自己の発達 風間書房

佐久間路子 2008 児童期における自己の成長に関する認識～縦断的インタビュー調査による検討～ 日本発達心理学会第19回大会発表論文集 P767

「音楽理論の視点から分析する子どもの歌曲の特徴」 ～日本における歌唱教材の特徴と東西比較の研究～

子ども学科 秋山 治子

報
告

1. 研究の目的

「歌う」という大枠で括った幼児の歌唱行動を細分化してみると、様々な切り口が見える。それらは例えば聴覚機能の側面、音群知覚・時間的及び空間的記憶・想像表象の保持・再現・表現等の側面、発声機能面、音感的発達の側面・その他音楽美の精神的受容の側面等にまで言及することができよう。このように歌唱成立までの過程や側面が含まれる子どもの歌唱行動は、保育・教育の場において取り上げられる歌唱教材によってその発達を促され、左右されても不思議ではないと考える。

研究の主たる目的と研究方法は、子どもが現在および将来、より幸せに育つための歌唱教材の追及を視座に据えつつ、①歌唱教材の現在の状況を調べて第一次資料を作成し、②私立幼稚園、私立保育園、公立保育園ではどのような歌唱教材を展開しているかに関する整理と分類を行い、それをもとにした③楽曲構造と内容分析を行い、④そこから見えてくる課題や問題点を示し、⑤考察することである。⑤においては、保育・教育音楽活動の在り方についてもできれば考察を深めたいと考えている。企画当初には、日本の幼児曲と関係深いアメリカの歌唱曲を比較研究する予定を立てて

いたが、これについては本研究の5つの課題を終了させてから手掛けることにしたい。

2. これまでの研究経過

2010年6月から研究を開始した。東京都全域を対象地域として、公立保育園300件・私立保育園300件・私立幼稚園300件、合計900園にアンケート質問紙を郵送した。一つの園に対しては同形式・同質問内容で、「3歳クラス」「4歳クラス」「5歳クラス」に分けて各担当者が記載できる形にして合計3枚の質問紙と挨拶文を同封した。アンケート用紙の作成にはかなりの時間をかけて推敲を重ねた結果、8月初旬に完成させることができたが、郵便局等の手続き完了後、送付開始ができたのは9月であった。12月と翌年1月に回答の返信を受け取るまでの期間は、楽曲分析のための音楽理論書の研究に取り組んだ。楽曲アナリーゼに関する文献研究を行ったが、これをもとに、これからアナリーゼ（楽曲分析）を開始する予定である。

今後の研究計画

これまで、第2項に示した5つの研究項目のうち、①をほぼ完了したという時点にとどまって

いる。②についても手掛けは始めているが、公務におわれて未完成である。進まない大きな理由は、殆どの回答内容が記述式であり、1園からの返信が、A3の回答紙3枚、という点にあり、それらの整理分類にかなりの時間を要している点にある。多忙をきわめる保育園・幼稚園から回答をいただき感謝と嬉しい悲鳴を上げているのであるが、これらのまとめには今後まだ少し時間を要す

る予定である。

今後の予定として、今夏に「研究ノート①」として「保育園と幼稚園において実践されている歌唱教材の一覧表」の第一次資料をまとめ、それに関する考察を行い、冬には「研究ノート②」と題して音楽理論的分析にとりかかり、来年早々にはその発表をしたいと考えている。

就学前教育における発達課題とその遂行——幼保一元化と小学校への接続

研究代表者：子ども学科 佐々 加代子

共同研究者（嘱託研究員）：梅沢 好文・渡邊 和弘・福島 一恵

I. 研究目的

小学校現場では小1問題のみならず、各学年において学級崩壊も珍しくなくなった。これは就学前教育の問題でもある。小学校への接続がスムーズに移行していくには、家庭における保育のみならず、多くの子どもたちが乳幼児期を過ごすことになってきた保育・教育機関の保育・教育内容の検討が欠かせない。その子どもたちの乳幼児期からの発達の連続性における視点とそこに見出せる問題点は、保育・教育機関の内容によっても、そこにいる専門職によっても見出しがたの違がある。育ちの時期の年齢が同じであるのに、育成機関が異なることによっての違いもかなりある。幼保一元化がうたわれてもなお、実際現場においては、その成果が見えてこない。本研究は、幼稚園、保育園、認定子ども園の現場の保育・教育の実践をすすめながら、個々の子どもの発達課題、共通する子どもたちの発達課題、および、運営側の課題について見出して点検・修正しながら、一元化にかかわる内容検討、小学校への接続について検討し、就学前教育に寄与することにおく。

II. 2010年度は以下のようにすすめて成果を得た。

1. 幼稚園、保育園の実際を把握すること

①学校法人所沢文化幼稚園（6園の幼稚園，1保育園）東京都内の公的保育園，民営の保育園などの実際について（保育言語研究会などで資料として提供される内容も含む）佐々は少なくとも、毎月1－2回現場に出向いて育ちの過程についての観察をし、個別あるいは、共通する改正点などについて、とりまとめ、保育・教育実践に生かせるようにした。行事についても参加観察しながら、取りまとめた。

2. 共同研究者たちとの研究会で（毎月平均1回は開催）上記の保育・教育の実際について得られたこと、発達課題などの確認を行い、その背景要因について検討した。保育・教育課程への組み入れを行った。現在の子どもたちに負荷がおおきいのではないかとみなされたことについては、ゆるやかにしていくこと、対応の難しい子どもが多い場合には、1週間、1ヶ月のなかで内容が可能になるように、ゆるやかな運営を行うようにした。所沢文化幼稚園関係では、教員、保育士たちへの伝達などは、園長経由で行った。それ以外